

教育思想史学会 第16回大会

プログラム

History
of
Educational
Thought
Society

2006.9.17(日), 18(月)
日本女子大学目白キャンパス百年館

交通案内

- ・JR山手線目白駅下車徒歩15分
- ・または、JR山手線目白駅前より新宿
駅西口・椿山荘行き都バス(白61)
日本女子大前下車徒歩1分
- ・または、営団地下鉄有楽町線護国寺駅
下車徒歩約10分

参加費

[会員]

一般=2,000円 学生・非常勤=1,000円

[非会員]

一般=2,500円 学生・非常勤=1,500円

懇親会費

[会員・非会員ともに]

一般=5,000円 学生・非常勤=3,000円

年会費

一般=5,000円 学生・非常勤=3,000円

事務局からのお知らせ

コロキウムなどの部屋は変更されることがあります。大会当日の受付でご確認ください。

大会一日目の懇親会は、日本女子大学目白キャンパス内の生協食堂で開催いたします。年に一度の会員どうしの集いです。多くの方々のご参加をお待ち申し上げております。

教育思想史学会

History of Educational Thought Society

〒214-8565 神奈川県川崎市多摩区西生田 1-1-1

日本女子大学人間社会学部教育学科内

TEL: 044-952-6873

URL: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/hets/>

E-mail: hets@fc.jwu.ac.jp

タイムスケジュール

第1日: 2006.9.17(日)

10:00-12:00 理事会・編集委員会

12:00- 受付(百年館1Fロビー)

13:30-15:15 フォーラム1(百年館502号室)

近代教育学の脱構築に向けて—エピソード「かさこじぞうのテキスト空間」の射程

15:30-17:15 フォーラム2(百年館502号室)

大人の教育としての哲学: デューイからカベルへ

17:30-18:15 総会

第3回教育思想史学会奨励賞表彰式
(百年館502号室)

18:30-20:00 懇親会 日本女子大学生協食堂

第2日: 2006.9.18(月)

9:30- 受付(百年館1Fロビー)

10:00-11:45 フォーラム3(百年館502号室)

子どもの本とモラル・リフォーム ジョン・ロック教育思想の受容と転用の一側面

13:30-16:30 コロキウム

(101教室、102教室、103教室)

文字の拡張: 文字と教育の思想史 pt.2

身体モノローグ/ダイアローグ

シュタイナー教育思想の現代的意義を問う

コロキウムの概要は別紙「コロキウム概要」をご覧ください。

Forum 1

近代教育学の脱構築に向けて
エピソード「かさこじぞうの
テキスト空間」の射程

報告 西岡けいこ（香川大学）
司会 田中每実（京都大学）

子どもにとって、家庭とは、切るに切れない存在で在り続けるという意味での絶対的権威者である親の声に支配される、単一的ロゴスの時空であるのに対比して、複数者で文字を囲む時空である学校は、複数のロゴスの時空である。他なるものを含み差異化を生じさせるテキストの開けにおいて、原理的に、学校は家庭よりもはるかに勝っている。もとより人間にとってこの世界全体を意味生成の場の開かれる「教室」とみなせるが、学校にはその際立った可能性が認められる。そのことを、拙著『教室の生成のために』（2005年）に収録したエピソード「かさこじぞうのテキスト空間」にそくして具体的に示す。それを以て、かつてメルロ＝ポンティが近代教育学の脱構築をめざしてなした教育学講義を、身体性を基底にするリテラシーを観る全体的な姿勢の回復の提起として、再解釈し、その現代的意義を論じる。

Forum 2

大人の教育としての哲学
デューイからカベルへ

報告 齋藤直子（京都大学）
司会 丸山恭司（広島大学）
指定討論 田中智志（山梨学院大学）

目に見える成果を志向する発想に支配される今日の教育の中で、いかにして教育哲学は、思想と言語の自律性を維持しつつも何らかの有用性を示すことができるのであろうか。この問いへのひとつの応答として、本発表は、デューイの実践哲学における「終りなき成長」の思想の教育的意義を、カベルによるエマソンの道徳的完成主義との批判的対話に従事させることによって明らかにする。拙著、*The Gleam of Light: Moral Perfectionism and Education in Dewey and Emerson* (New York: Fordham University, 2005)から、カベルの著作の拙訳書『センス・オブ・ウォールデン』（法政大学出版局 2005年）への移行の過程で浮かび上がってきた、「デューイからカベルへ」の思想史的継承と転換、連続性・非連続性の両義性を考察する。両者の批判的対話を通じて、「デューイからカベルへ」のアメリカ哲学が「大人の教育としての哲学」という教育的意義をもつものであることを導き出してゆく。

Forum 3

子どもの本とモラル・リフォーム
ジョン・ロック教育思想の
受容と転用の一側面

報告 岩下誠（東京大学大学院）
司会 森田伸子（日本女子大学）

1780年代から90年代のイギリスでは、モラルの強調や改善を掲げ、奴隷貿易廃止・監獄改革・動物愛護などの社会改良運動が、中間層を主たる担い手として高揚した。この危機感は、アメリカ独立革命からフランス革命にかけて名誉革命体制が大きく動揺する中で、国家を支えるべき国教会の機能不全が教会の内外から認識されたことに起因する。同時期の日曜学校運動や教訓的な子どもの本の執筆や出版といった事態も、このようなモラル・リフォーム運動の一環として理解しなおされる必要があるだろう。

そこで本報告では、1780年代以降の女性教訓派作家を採り上げる。彼女たちは、勤勉、敬虔などのキリスト教道徳を注入するべくモラル・テイルズと呼ばれる児童文学ジャンルや教科書、子育て書などを著した。彼女たちの作品や思想そして具体的な運動を、モラル・リフォームを担う中間層の政治的および文化的戦略行為として把握し、さらにその教育思想や執筆活動において、彼女らがロック教育思想をどのように転用したかを明らかにしたい。